

中記録に、嘉祿二年九月七日白山神興振の段に、豊田光成入道の三男大夫法橋成舜御供田の地頭に被補云々とありて、成舜は廣岡三郎利成の弟也。大野郷訪古游記に、豊田郷。鎌倉氏時。豊田五郎光成古爲私田。今作戸板。といへり。されば豊田郷は今いふ戸板郷にて、そのかみ此の郷の地頭職なりしゆゑに、豊田を稱號とせしなり。又其の子廣岡三郎光成は、豊田の郷内なる廣岡村を分與し、此の村の地頭なりしなるべし。故に廣岡を稱號とせし事知られけり。さて此の稱號をば弘岡或は廣岡とも書きたるにや。今苗字の廣岡氏は、その後裔ならんか。

○廣岡御茶水

此の木は、北廣岡の村脇放生寺の後なる小路の往來脇にあり。龜尾記に云ふ。寛正三年の舊記に、石川郡廣岡千壽院といふ寺に水あり。御菩薩池といふとあり。恐らくは廣岡なる御茶水は此の井ならんかと、城南考に見ゆ。今放生寺の地は、善しう院といふ古刹の舊地也といへれば、由縁ある井なるべし。此の井従前は名高き冷水にて、茶道家など名水の一つとなし、甚だ賞翫し、中納言利常卿の頃は茗水

に汲ませられたり。依りて御茶の水と呼べり。今は其の名も絶えたる如くなれども、其のさきは走り井にて、井筒より高く走出でしが、今は水勢衰へて、走り出る事もなく、名井の名のみ残りといへり。平次按ずるに、年代摘要に、貞享元年五月。御膳水井戸柵取拂、常汲可申旨被仰出。とあり。されば此の時より御膳水とて、藩侯の被召上用たること止みたるか。但し改作所舊記に載せたる元祿七年正月の書簡に、
奥御臺所御水汲小者、御門往來燒丸印札落申に付、御城代に御案内申候處に、隨分相尋候様被仰渡候。御膳水井戸廣岡村近邊、其外御郡方之者拾取申者御座候はゞ、早速御案内可被下候。爲其如此御座候。以上。

正月十五日

内藤市郎兵衛

渡邊彦左衛門様

永原權丞様

右書簡にて見れば、元祿年中までも御膳水に成り、城中より汲ませられし事知られけり。

○御茶水番人居跡

舊傳に云ふ。昔此の冷泉、御膳水とて藩侯の被召上用の井戸なりし頃は、嚴重に縮り方を付けられ、井戸の傍に御茶水番人とて二人の居宅ありて、膳水の番をなしたりと。右番人の舊宅なりとて、放生寺の境内へ入込みて二戸ありしかど、廢藩の後毀ちて今はなし。右井戸及び番人の宅共に、皆放生寺の境内へ入込みあれど、是は此の地放生寺の寺地にならざる以前より井戸及び番人の家ありしゆゑなり。依つて放生寺の圍に人込み、生垣をなしたるもの也といへり。

○廣岡冷水傳話

前田創業記に云ふ。天正十二年九月六日。佐々成政潛兵出富山城。同十一日。進到能州吾妻野。急欲攻末森。屯天神山。縱火於紺屋町。今日未刻。末森飛夫踵金澤城。公同日未下刻。吹螺發金澤。召步卒曰。聞末森水手既敗。願城兵水乏及渴乎。汝等汲廣岡名水入籠來。可飲城兵乎。揚鞭。とあり。此の傳話世上にも聞えありしにや。湯淺元禎の常山紀談にも、天正十二年九月末森後援の事を記載して、末森は水に乏し、廣岡の水を汲んで、さゞえに入れ、急ぎ追

ひ付けよ。後卷の土産にせんとぞ下知せられける。と載せたり。高昌定延の菅君雜錄に、其の頃足輕ども多くは宮腰口に居たる故なりといへり。三州志韃毘餘考に云ふ。年譜に、公此の時末森城水乏しき事を兼ねて推知し給ひ、出軍の節廣岡の水を竹筒に入れて持たせ、奥村永福等に與へ給へば、城兵千萬金を賜ひしより百倍の思ひをなす。とあり。按ずるに、水を持たせらるゝ事はあるまじき事にも非ず。然れども廣岡といふ事甚だ迂遠也。此の傳説は信するに足らずといへり。

○廣岡五香湯

此の薬は、産前産後の薬にて、世人廣岡の五香と稱し、甚だ高名あり。其の製出する者は、廣岡五香屋と呼びて、北廣岡村に本末兩家ありて、毎月上十五日は本家に調合し、下十五日は末家に調合す。此の薬法は元と小立野石引町奥村氏の家中村田氏の傳方にて、今も村田氏にも製出せり。彼の傳説に云ふ。昔廣岡村の百姓娘村田氏の乳母と成りけるが、其の子の代に成り、乳母の功勞を謝せんが爲め、家傳の薬方を傳へけり。然るに年を逐うて名高く成り、今は